

「子育てに関する父親の意識と行動に関する研究」 —男女共同参画社会をめざした生涯学習の基礎課題—

梨子 千代美
(川村学園女子大学)

【要旨】

本論文は、実際に子育てに関して、父親は子どもに対してどのように関わっているのか、そしてその行動の背後にはどのような意識があるのかを調査分析したものである。今回の調査は、面接で行い、実際に父親から語られた行動の違いを類型化し、それによって父親の行動の背後にある意識の違いの分析を試みたものである。

その結果、父親の子育てに関する行動と子育てに関する意識との間には大きな相関関係があることが明らかとなった。すなわち、子育てに「関わっている」と強く認識している父親では、性役割観が流動的で、父親・母親の両方が子どもにとって絶対に必要だという認識を持っていることが明らかになった。それに対して、子育てに「関わっていない」と感じている父親では、性役割観が固定的で、父親・母親の両方が子どもにとって絶対に必要だという意識を持っていないことが明らかになった。

1. はじめに

我が国では、1999年6月に男女共同参画社会基本法が成立し、行政においても様々な講座が開講され、男女共同参画を目指す動きや教育活動が活発になってきている。確かに、同年3月に厚生省による男性の育児参加キャンペーンが話題をよんだ。

しかし、その一方で現実には、1996年に労働省女性局が行った調査などを見ると、育児休業をとっている女性は99.2%なのに対し、男性では0.8%¹⁾にすぎないという報告がある。これには、現実には仕事を中断しにくい我が国の雇用・労働の事情があると考えられるが、父親の育児に対する意識の問題、すなわち、伝統的な性役割観にもとづく行動様式があると考えられる。

これに関係して、父親の家事・育児について論じた先行研究に、柏木恵子の「子ども・育児による親の発達」という研究がある。この中で「大いに家事・育児に参加しているお父さんは、性役割についての考え方がより革新的…男性も家事・育児を担うべきで…女性の社会進出を積極的に肯定する男性が、実生活でも家事・育児により多く関わっている」²⁾という主旨のことを述べており、本研究においてはこのことを実証してみたい。

さらに、もう一つの先行研究に、中野由美子の「はじめの3年間の子どもの発達と父子関係」という研究がある。この中で中野は、父親の家庭生活の実態と意識を反映した生活実態パターン別に、幼児と父親のかかわりの関連を明らかにする目的で、生活実態3項目（仕事点、家族での夕食回数、夫婦の会話）を組み合わせてパターンを作り、その特徴的な3群（「家庭優先派」「中間・接触あり群」「仕事優先派」）を比較している。その結果、子どもに関わりを持つ父親になるかならないかは、物理的条件のみならず、心理的、意識的な条件も重要になる³⁾と指摘している。しかし、この研究では、どのような心理的・意識的な条件なのか、その内容についての報告はない。

2. 研究の目的・方法

したがって、本研究は、意識の部分に焦点をあて、実際の父親の育児に関する行動の背後にある意識を明らかにすることを目的とする。そして、意識の部分の明らかにすることによって、成人における男女共同参画に向けての学習の基礎・あり方も考えてみたい。

今回は4歳～6歳の子どもをもつ父親・母親(専業主婦)₄₎に面接調査を行なった。面接調査は3地域(都心部、やや都心に近い所、郊外)で行ない、対象となった父親・母親は延べ31名、そのうち父親・母親のペアで面接できたのは7組14名であった。

3. 研究結果

まず第一に、父親の子育てへの関与という点から見ていく。子育てに父親がどの程度関わっているのかということと、実際に父親がどのようなことをしているのかを見るものとして、以下のような質問をした。

「あなたはお父さんとして子育てに関わっているほうですか。それともいないほうですか。

い る→・どのような点で関わっていますか。 ・それはいつ頃からですか。

いない→・それはどうしてですか。」

この質問に対して、父親から語られた子育てに関する行動の結果は、①「遊ぶ・一緒に過ごす」②「何処かに連れて行く」③「おむつの替えをする」④「子どもにミルク・食事を与える」⑤「抱っこをする」⑥「子どもの服を設定する」⑦「子どもをお風呂に入れる」⑧「子どもが寝る時本を読んであげる」⑨「子どもと一緒に登園する・迎えをする」⑩「子どもの話し相手になる」⑪「子どもと食事を一緒にする」⑫「嫉をする」で、これらの12の行動を「子育て」と父親たちは認識していると考えられる。

また、その際に子育てへの関わり具合を尋ねたところ、これらの行動を多く行なっている父親は、父親自身が子育てに「関わっている」と強く認識しており、行なっていない父親は、父親自身も「関わっていない」と感じていることが明らかになった。

さらに子育てに「関わっていない」と回答した父親に、関わっていない理由を尋ねてみると以下のような回答例₅₎があった。

・「平日は夜かなり遅く、子どもが寝静まったところに帰ってくるので、晩御飯も一緒に食べないし、土・日・朝くらいしか子どもに会わない…」(No.7父親)

このように、子育てに「関わっていない」理由として「仕事が忙しい」ということがあげられていた。

しかし、先ほど紹介した中野の「子育てに関わるか関わらないかは父親自身の心理的、意識的条件が大きく関わっている」₃₎という報告もあり、仕事が忙しいという表面的な理由からさらに深く掘り下げ、その背後にある意識の違いを見ていきたい。

そこで次に、子育てに「関わっている」と強く認識している父親と、子育てに「関わっていない」と感じている父親との意識の類型性を探るため、子育てに「関わっている」父親と「関わっていない」父親との行動の違いをみていくこととする。

ここでは、できる限り日常生活と同じような状況の中で、父親・母親自身の日常の言葉によって表現されたものから一定のパターンや規則性・類型性を探るため次のような質問をした。

「暗くなってからお子さんがトイレへひとりで行くのを嫌がったことはありますか」

この質問に対し、子育てに「関わっている」と回答した父親からの回答例は次のとおり

である。

- ・「(もしその様なことがあったら)抱っこしてつれていくしかない…。今はみなお父さん子なんで女房に頼むことはない…」(No1 父親)

これに対して、「関わっていない」と回答した父親からは、次のような回答例があった。

- ・「私でなく家内がついていきました。家内が手が離せない時は私がついていきます …」
(No.22 父親)

このように、この質問から子育てに「関わっている」と回答した父親では、父親がかなり積極的に子どもに関わろうとする様子が見られたのに対して、「関わっていない」と回答した父親では、たとえ父親と子どもが家の中に一緒にいても、母親に任せてしまうか、あるいは母親がどうしても手が離せない時に子どもをトイレに連れて行くというような積極的ではない傾向が見られた。

次に子どもを叱る時の父親の行動の違いを見てみることにする。

子育てに「関わっている」と回答したものの回答例は次のとおりである。

- ・「片方が怒る時はもう片方がフォローしています。」(No.15 父親)

このように、「関わっている」と回答したものでは、父親が子どもを怒った時は母親が、母親が子どもを怒った時には父親が、フォローすることをお互いに意識している傾向が見られた。

しかし「関わっていない」と回答したものでは、お互いにフォローし合う傾向は見られなかった。この他に違いが見られたのは、次のような質問に対する回答である。

「お子さんが友達と遊んでいるとき、友達と喧嘩をしていたらどうしますか」

この質問に対して、子育てに「関わっている」と回答した父親からは、次のような回答例があった。

- ・「…家に帰って子どもと視線を合わせて話を聞いてあげようと思います。」(No.1 父親)
- ・「横で見えます。1ラウンド終わってからその時の反省をさせます。」(No.15 父親)

これに対して、子育てに「関わっていない」と回答した父親からは、次のような回答例があった。

- ・「…見てました。…怪我しない程度ならいいんじゃないかな。」(No.7 父親)
- ・「…エスカレートするようなら止めます。でも喧嘩は必要…子どもに言ってるのは殴ってもいいからやりすぎず、自分も殴られる痛みを知れと。」(No.22 父親)

以上のように、子育てに「関わっている」と回答した父親は、喧嘩の後、子どもと話し合う機会を持つ傾向にあるのに対し、「関わっていない」と回答した父親では「子どもの喧嘩の後の対処がないか、父親から子どもへの一方的な注意があるだけ」であった。

なぜこのような違いが出たのかについては、子育てに「関わっていない」と回答したものの次のような回答例から推測できるのではないと思われる。

- ・「朝早く…帰りも早くは帰ってこないの、子どもの生活面には口を出せない…」

(No.4 母親)

この回答例から推測すれば、子育てに「関わっている」と回答した父親は、子どもに多く関わっている分、躰に対して責任を持っているのに対して、子育てに「関わっていない」と回答した父親は、子どもに接していない分、躰に対する責任を持つことが難しい状況にあるようだと考えられる。

また、前述したような子どもの喧嘩の時の父親の対処の違いは、家庭の中に一定のルール（規範）を設けているかどうか、また、家庭のルールや父親と母親の考えを、生活の中で積極的に子どもに示しているかどうか、ということとも関連があった。

まず、子育てに「関わっている」と回答した父親の回答例は次のとおりである。

- ・「喧嘩はするべきではないけれど。弱いものいじめはするな、自分に落ち度がなくしかけられたのは、…ぶん殴っていいと(子どもに)言って…両親一緒の考え…うちは人にやさしくしていれば自分にもかえってくるし、人に意地悪をしていたら、自分も同じ目に会おうと教えています。」(No.15 父親)

これに対して、子育てに「関わっていない」と回答したものには、家庭のルールを設けていたり、常に父親と母親の考えを子どもに示す行動はみられなかった。

また、「関わっている」と回答したものでは、父親と母親がそれぞれお互いの考えを話す機会を持ち、躰に関して同じ方向性を持っている傾向がみられた。その回答例は次のとおりである。

- ・「基本的に私が子どもにいけないといっていることはお父さんもいけないと教えてねといってきました…」(No.1 母親)

これに対して、子育てに「関わっていない」と回答したものの回答例は次のとおりである。

- ・「私と彼が育ってきた環境によってずれてくる…スポーツに関しては私は不得意だったので子どもはできなくてもいいと思いますが、彼は子どもに頑張れと言って、私には押し付けのように思えます。」(No.7 母親)

この回答例から明らかなように、父親と母親との間で意見の食い違いがみられたり、父親と母親の躰の方向性が一致していることを示す回答はみられなかった。

また、子育てに「関わっている」と回答したものでは、父親から母親へのアドバイスがみられる傾向があった。その回答例は次のとおりである。

- ・「主人に『怒り方が違うよ…もう少し感情を押さえて子どもに言えばいいんだよ』といつも言われます。」(No.1 母親)

しかし、子育てに「関わっていない」父親では、父親から母親へのアドバイスはみられなかった。

以上のように、子育てに「関わっている」と強く認識している父親と、「関わっていない」と感じている父親の行動の違いが明らかになったが、その行動の背後にはどのような意識の違いがあるのか、それを明らかにするために、次のような質問を行なった。

「お父さんとお母さんは同じ役割をしたほうがよいという考え方がありますが、あなたはどちらですか」

この質問に対し、子育てに「関わっている」と回答したものの回答例は次のとおりである。

- ・「総労働量は同じくらいに保つのがお互いにいい…」(No.15 父親)
- ・「男女平等という考えを持って(子どもを)育てている…自分のことは自分で出来るように掃除や、料理も出来るだけやらせる…父親と母親が同じ役割をするようになれば、子どもが自立して依存心がなくなる…」(No.15 母親)

これに対して、子育てに「関わっていない」と回答した父親の回答例は次のとおりであ

る。

- ・「役割分担は同じことができればやればいい…時間的にできない男の人が多い…」

(No.7 父親)

- ・「(父親と母親は同じ役割はできない) …基本的に男は外に出て働いているし、女性は家でいろいろなことをやっている …」(No.22 父親)

以上のように子育てに「関わっている」と回答したものでは、性の違いが、役割を決定する際の要因とはなっていないといえそう。そして、従来の性役割観にとらわれず、父親も母親もお互いが積極的に子どもに関わっていこうという意識を持っている傾向にあった。

このことは、前述した柏木恵子の「子ども・育児による親の発達」という先行研究の中でも述べられており、本研究でも同様の結果がでていたといえる。

これに対して、「関わっていない」と回答したものでは、性の違いが役割を決定する際の一つの要因となっているといえそう。また、子どもに対して父親が母親と同じように関わることは無理だと考えており、従来の固定的な性役割観を父親・母親の両方がもっていることも明らかになった。また、母親がそうした父親の考えを支持し、従来の性役割を受け入れていることがうかがえた。

また、父親と母親の必要性に関する次のような質問を行なった。

「お父さんとお母さんどちらか一人いれば十分だと思いますか。」

この質問に対して、子育てに「関わっている」と回答した父親からの回答例は次のとおりである。

- ・「そうはいかない…。役割分担違う…。うちは僕が仕事で女房がうちにいます。子どもとは常に会話してあげることが必要…。(僕は仕事なので、仕事に行っている時には子どもと会話してあげられないので、母親にフォローしてもらうということ。)」

(No.1 父親)

これに対して、「関わっていない」と回答した父親からの回答例は次のとおりである。

- ・「十分とは思わないけど、いなけりゃいけないで何とかする…」(No.7 父親)
- ・「…片親であってもその人のモチベーションや周りの環境次第 …一概には言えませんが。」(No.22 父親)

この様に、子育てに父親が「関わっている」と回答したものは、事情がある場合は別として、「父親・母親が二人そろっていればお互いにフォローし合うことができること・子どもの発達にとって父親、母親が必要であること」を強く意識している傾向にある。

それに対して、子育てに父親が「関わっていない」と回答したものは、父親と母親のどちらか一人いれば十分とまではいわないが、「いなければいけないで何とかする、その人のモチベーションや周りの環境次第」と回答しているところからも明らかなように、子どもにとって父親・母親は絶対に必要であるという意識を、父親自身が持っていない傾向が見られた。

4. 本研究のまとめ

以上、①父親の育児への関与、②子育てに「関わっている」父親と「関わっていない」父親との行動の違い、③意識の違い、という視点から分析を試みた。最後にその結果をまとめると次のような二点になるかと思われる。(表1 参照)

一つは子育てに「関わっている」と強く認識している父親は、性役割観が流動的で、父親・母親の両方が子どもにとって絶対必要だという意識を持っている。

二つ目は、子育てに「関わっていない」と感じている父親は、性役割観が固定的で、父親・母親の両方が子どもにとって絶対必要だという意識を持っていない。

つまり、本研究の目的は、父親の子どもへ接し方の背後にはどのような意識があるのかを明らかにすることであった。子育てに関して子どもへの接し方の背後には、父親自身が「性役割観が流動的であるか、固定的であるか」「父親と母親の両方が子どもにとって必要と意識しているか、いないか」という意識の違いがあり、この意識の違いが行動に違いとなってあらわれたところでは考えられる。

このことは、父親の家事・育児についての先行研究として「はじめに」で紹介した、柏木恵子の研究結果を実証できたといえそうである。

表 1 関わっている父親・関わっていない父親の行動の背後にある意識の相違点

「関わっている」と強く認識している父親	「関わっていない」と感じている父親
性役割観が流動的	性役割観が固定的
父親・母親の両方が必要だと強く認識	片親でも何とかする、その人のモチベーション・周りの環境次第

5. 男女共同参画社会実現に向けた生涯学習の基礎課題

以上のような調査結果から、今回は家庭という場面に限定されているが、我が国の男女共同参画社会への移行をさらに推進するには、固定的な役割行動の変革、さらにそれらの基礎となっている個人の意識の変革が必要だと思われる。そのためには生涯学習の一貫として、変革の主体者となるための学習の機会を、親をはじめとする成人や子どもに対して積極的に提供し、その内容をさらに充実させていくことが必要だと思われる。

たとえば、従来の女性学や男女共同参画社会に向けての学習を考えてみると、学習者を主体とした「参加型学習」をとっている。そして、その学習の流れ・内容は、①認知→②認識→③コミュニケーション→④表現・実践→⑤評価の5段階⁶⁾とされている。各段階において様々な方法が開発されているが、例として簡単にいくつかあげると次のようである。

- ①段階－自己紹介、女の経験をKJ法で洗い出す、コンシャスネス・レイジング、カラージュ等
- ②段階－講師による女性学講義、生活時間調査、地域調査、メディア分析、裁判傍聴、自分史、文学等鑑賞
- ③段階－討論、アサーティブ・トレーニング、ロールプレイ、演劇などによる自己表現等
- ④段階－アート／ビデオ制作、報告書・記録集の制作、自治体行政・市民運動への参画等
- ⑤段階－総括討論、評価アンケート

以上が学習の方法である。

本研究の調査結果では、子育てに「関わっていない」と感じている父親は、固定的な性役割観を持っていることが明らかとなっている。このような固定的な性役割観というものは、社会学的に見れば、「日本の親・日本の家庭」の中で山村賢明も言及しているように、社会生活の表層にあらわれるような男性、女性のあり方の違いは、文化によって規定され

たものであり、子どもの社会化の過程を通じてつくられるものである⁷⁾。

そうであるならば、仲間集団、学校、職場、近隣社会、マスメディアなどの日本の社会の至る所に、潜在的に存在しているものである。また、日常生活をとおして、自然に個人の中に浸透しているものであるだけに、意識の変革には多くの課題を抱えていると思われる。

たとえば、固定的な前提・価値観をもつ成人学習者が、前提となっていた源を問い直し、新たな価値観を身につけて行動を開始しようとしているとする。男女平等に関する法律や諸制度が整備されているとはいえ、子どもの社会化を通じて個人の中に浸透した役割行動というものは、根が大変に深く、周囲の理解を得ることが困難な状況に遭遇するかもしれない。そのような状況に遭遇した際、男性と女性が現実から逃げずに、現実を受容する認識をもち、固定的な意識を変革していくことが必要になると思われる。

その方法の一つとして、伊藤友宣の「対話」についての言及が参考になるかと思われる。

伊藤は「対話」の重要性について、カウンセラーとしての経験・事例を紹介しながら、次のように指摘している。「話せば違いが分かる、というのが『対話』の本質だ…意見の違い、立場の違い、利害の違いを明確化するほど…違いを違いとして認識しあい、お互いに相容れない部分があることを認めざるを得ぬ残念さを、共通の残念さとしながらも、…とにかくまともに話し合う関係から逃げないかぎり、意外な譲歩や意外な寛容がどちらからともなく生まれざるを得ないものなのである。つまり、『対話』は続ければ続けるほど、対立葛藤の部面を止揚して行かずにはおかぬもの」⁸⁾であると述べている。

このような「対話」こそ、男女共同参画社会を実現するためには有効な手段であり、男女共同参画に向けての学習の流れの中に、不可欠な過程であると思われる。

本論文においては、先に示した男女共同参画に向けての学習の流れの中に、「対話力」を養うための学習段階を加えることを提起したい。この「対話力」を養う学習に関して、成人対象の学習であるということを念頭におき、学習方法・内容・教材などをさらに検討していくことが、今後の男女共同参画社会実現に向けた生涯学習の基礎課題であるといえよう。

注記・引用文献

1) 労働省女性局「女子雇用管理基本調査」1996

2) 柏木恵子「子ども・育児による親の発達」

『子どもの発達と父親の役割』ミネルヴァ書房、1996、p. 71

3) 中野由美子「はじめの3年間の子どもの発達と父子関係」

『子どもの発達と父親の役割』ミネルヴァ書房、1996、p. 47

4) 調査の対象を4才～6才の子どもを持つ父親・母親とした理由は以下のものである。

まずラバンは、子どもは4才頃までに性別についての自己意識を持つようになると述べており、日本においても当てはまるであろうと考えられる。

また社会学的観点から見ると、この頃から母親の力のみでは子どもの要求に応えることが困難な状況となり、母親は父親の力を借りることで、子どもは母親に対する父親の存在を認識するようになる。この時期を出発点として子ども自身における性の認識＝社

会化が行われる。

したがって、この時期の父親の子どもに対する接し方やその背後にある意識を探りたいと考えたためである。

- 5) 質問項目ごとに見た場合、回答に多少の違いは見られたが、全体的に見た場合には、「関わっている」と回答した父親の行動や意識に大きな違いが見られなかった。したがって、子育てに「関わっている」と回答した父親・母親をペアで面接できた者の中から、いくつかを代表とし、「回答例」を掲載している。(子育てに「関わっていない」と回答した者についても同様である。)
- 6) 国立婦人教育会館女性学・ジェンダー研究会
『女性学教育／学習ハンドブック〔新版〕』有斐閣，1999，p. 200
- 7) 山村賢明「日本の親・日本の家庭」金子書房，1986，pp. 212-231
- 8) 伊藤友宣「家庭のなかの対話」中央公論社，1998，pp. 167-168